10. 祭り

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/46932

10. 祭り

宮下 貴大

1. はじめに
2. 地区ごとの神社祭礼
3. その他の祭り
4. 従来からある祭りと現在の祭り
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

今回調査した上町地区は、上町、合鹿、中ノ又、わすみ団地、天坂、寺分、五郎左エ門分、中斉、神和住の 9 町内に分かれており、それぞれに地区組織が置かれている。祭りなどの年中行事には、いくつかの地区が合同で行うものもあるが、多くの場合地区ごとに行われている。

本章ではそういった上町地区における町内ごとの祭りや、その他の年中行事について紹介し、年中行事が上町地区の人々の生活にどのように結びついているのかを考察する。

2. 地区ごとの神社祭礼

村の祭りの多くは春、夏、秋に行われ、その多くは地区の神社が中心となって運営をしている。また秋祭りは新嘗祭とも呼ばれ、作物の収穫を祝って行われる。伝統的なものとしては、収穫した作物を神社に捧げ、その後参加者もそれを食べることとなっている。その際、地区の人々がそれぞれ料理を持ち寄って集まり共に食事をする。これは秋祭りだけでなく、春祭りにおいても行われている地区もある。

ここでは上町地区の町内ごとの、あるいは複数の町内が合同で行っている祭りを紹介する。

表 1　各地区の神社

地区名	祭礼を行う神社
上町	菅原神社
合鹿	岩多神社（上合鹿） 羽黒神社（小木ノ又） 伊須留岐神社（言若）
中ノ又	豊受神社
わすみ団地	なし
天坂	天坂神社
寺分	日吉神社
五郎左エ門分	日吉神社
中斉	八幡神社
神和住	火の宮神社

（出所：聞き取りをもとに筆者作成）

2.1 上町

A さん（上町、男性、71 歳）への聞き

取りに基づき、上町の祭礼について記述する。

上町では春に 1 回、夏に 2 回（6 月・7 月）、秋に 1 回と年に 4 回の祭りが地区の神社である菅原神社で行われる。菅原神社の氏子総代は現在 6 人である。

この神社はバイパスが作られる際に神殿を移動させる必要があったが、当時の氏子総代の反対により予算が下り、神社は6mかさ上げされ、残った予算は社殿の外装に使われた。

表 2　各地区の神社祭礼の日程

地区名	春祭り	夏祭り	秋祭り
上町	4 月 4 日	7 月 22 日、23 日	11 月 5 日
合鹿	4 月 3 日	7 月 16 日（岩多神社） 7 月 10 日（羽黒神社） 7 月 15 日（伊須留岐神社）	10 月 11 日
中ノ又	3 月 14 日	7 月 17 日、18 日	10 月 17 日
わすみ団地	なし	なし	なし
天坂	4 月 5 日	7 月 21 日、22 日	11 月 20 日
寺分	4 月 10 日	7 月 25 日、26 日（合同）	10 月 15 日
五郎左エ門分	4 月 10 日		10 月 15 日
中斉	4 月 4 日	7 月 30 日、31 日	10 月 11 日
神和住	4 月 3 日	8 月の第一土曜日、日曜日	10 月 16 日

（出所：聞き取り調査をもとに筆者作成）

春と秋の祭りでは宮司が祝詞を挙げ、豊作を祈願する。6 月の祭りは天神祭と呼ばれており、昔、純金の観音像が神社から出てきたことに由来する。現在、その観音像は盗まれてしまいないとのことである。7 月は本祭であり 2 日間にわたり、最も規模が大きい。

祭りではキリコは上町内の集落ごとの班から出される。上猪谷地区・下猪谷地区で 1 つ、万敷・上和住で 1 つ、下和住・中和住で 1 つ出されるが、坪ノ口、山根、久亀屋では高齢化による担ぎ手不足のためキリコは出されなくなった。また本祭ではキリコの他

写真 1、2　上町地区神社祭礼の様子（いずれも上町公民館提供）

にお神輿も 3 台出ている。キリコやお神輿の他にも最近では花火なども行われている。

2.2　寺分・五郎左エ門分

寺分・五郎左エ門分では春と秋は別々に祭りを行うが、最も規模の大きい夏祭りは両地区合同で行っている。まずはそれぞれの地区の春祭り、秋祭りについて紹介する。

寺分では、春は 4 月 10 日に豊作祈願のために春祭りが行われ、地区内の班がそれぞれ分担して料理を作り、集まって食事をする。秋には 10 月 15 日に収穫を感謝する新嘗祭が行われ、春祭りと同様に料理が振る舞われる。祭りの予算は毎月徴収される一人 1,500 円の区費によって賄われている。運営は地区の総代、区長、青壮年団長から構成される祭礼委員から構成される（B さん　寺分、男性、64 歳）。

五郎左エ門分の春、秋の祭りの日程は寺分と同じで、それぞれ 4 月 10 日、10 月 15 日であり、地区の人々が十数人ほど神社に集まり食事をするというものである。秋の祭りは新嘗祭であり、収穫を祝って宮の田んぼで獲れたお米が配られる（C さん　五郎左エ門分、男性、66 歳）。

合同で行われる夏祭りでは、寺五の両地区から毎年交互にお神輿が神社から出され、それを担いで御旅所を通り、もう片方の神社まで運ばれる。そして祭りの 2 日目に再び担いで元の神社に戻される。夏祭りは 7 月 25 日、26 日にわたって行われ、25 日の夜にはヨバレ（後述）が開かれる。その際には各家はごちそうを振る舞い、多くの親戚や友人を家に呼ぶ。参加者についてはほとんどが寺五以外の地区から訪れている。祭りの運営は両区の宮総代 3 人ずつと、両区の区長、青壮年団長の 9 名で行われる（B さん）。

2.3　合鹿

合鹿地区には 3 つの神社があり、春祭り、夏祭り、秋祭り、は全てそれぞれの神社が別々で行う。3 つの神社とは、多々良・合鹿を合わせた上合鹿にある岩田神社、小木ノ又にある羽黒神社、言若にある伊須留岐神社である（D さん　合鹿、男性、62 歳）。

それぞれの神社は各班で管理され、区長は関わりがない。宮総代は各班から管理地にある神社に対して各 3 人計 9 人選出され、任期は 3 年である。またこれとは別に祭りの準備等を行う宮当番がいるが、これは毎年班で 1 人ずつ選ばれる（D さん）。

どの祭りでも神輿を出しているが、キリコは担ぎ手不足のため現在では用いられていない。夏祭りは宵祭りと本祭りの 2 日にわたって行われる。それぞれの地区の宵祭り日程は岩多神社が 7 月 16 日、羽黒神社が 7 月 10 日、伊須留岐神社が 7 月 15 日である。日程をずらしているのは祭りの際に神社を回る宮司が同じためである。秋の祭礼は新嘗祭である。

2.4　中斉

中斉と神和住は合わせて斉和地区とも呼ばれているが、神社はそれぞれの地区にあり、

祭りは別に行われる。

F さん（中斉、男性、67 歳）によれば、祭りに際して、班とは異なるキリコ組と呼ばれる組があり、中斉丑屋地組、神和住丑屋地組、平渡組、中組、下組の 5 つが存在する。各組では 1 つずつキリコを所有している。中斉では春祭りが 4 月 4 日に、夏祭りが 7 月 30 日と 31 日に、秋祭りが 10 月 11 日に行われる。現在、春祭りと秋祭りでは神事のみが行われているが、以前はキリコも出していた。夏祭りは、宵祭りではキリコ 1 つ神輿 1 社が、本祭りでは神輿 2 社が出される。

以前宵祭りでは 5 つのキリコ組から 1 つずつ計 5 つのキリコが出されていたが、人手不足のため平成初め頃から 1 つだけになった。また宵祭りではヨバレが行われる。以前は全て手作り料理だったが、現在では仕出しを利用している。

中斉では、区として神社へお金・お供え物の用意は行はず、組や個人で行う。また春と夏には封筒が個人の家に送られ、それにお金を入れ祭りの際に白山神社から来た宮司に各自奉納する。祭りの供え物は、5 つのキリコ組で毎年順番に担当し、その頭元が用意する。費用は組の中で分担される。

2.5　神和住

G さん（神和住、男性、79 歳）によると、祭りは春、夏、秋の 3 回行われる。春祭りは 4 月 3 日に、夏祭りは 8 月の第一土曜日・日曜日に、秋祭りは新嘗祭として 10 月 16 日に開催される。夏祭りでは宵祭りでキリコが、本祭りで神輿が出されるが、高齢化によりキリコの担ぎ手がいなくなりつつある。

以前は祭りの際に使用されるキリコには「子どもキリコ」という、子どもたちが夏休みの工作として作るキリコもあった。その他のキリコは青年団や各班で用意されていた。

また最近、寺の天井裏から 20 年ぶりに 8 尺＝20m 位のキリコが出てきたという（H さん　神和住、男性、61 歳）。

2.6　天坂

天坂地区の神社は天坂神社で、春夏秋にそれぞれ祭りが行われる。祭りは当番制で、地区内で 4 つの班に分けて順番を回す。掃除やごちそうの準備、お供えするものなど当番の班が役割を決め準備する。祭りは天坂地区単独で行われる（I さん　天坂、男性、67 歳）。

天坂神社では春夏秋の毎年のお祭りのときと、その他神社からの要望があった際に集金を行っている。秋の新嘗祭では 2,000 円程度の集金がある。不定期なものでは神主さんの家の建築費、催事に使う用具の修繕費、お宮の修繕費などがある（J さん　天坂、女性、67 歳）。

2.7 中ノ又

中ノ又では 3 月 14 日に春祭り、7 月 17 日、18 日に夏祭り、10 月 17 日に秋祭りが行われる。これらは全て中ノ又の豊受神社で行われる祭りである。神社から神輿が出されるのは春祭りと秋祭りである。夏祭りは 7 月 17 日が宵祭りで、7 月 18 日が本祭りとなっている。秋祭りは新嘗祭であり、かつては 11 月 17 日に行っていたが、稲刈り後に出稼ぎに出てしまう人が多くなったので、10 月 17 日に変更された。また他所に出ている若者も祭りに参加できるようにと祭りの日程を土日に変更したこともあったが、他の町内の祭りとぶつかりうまくいかなかった（K さん　中ノ又、男性、66 歳）。

2.8　わすみ団地

わすみ団地には地区内に神社がなく、神社祭礼は行われていない。

L さん（わすみ団地、男性、32 歳）によると、わすみ団地では旧柳田村の他の地区出身の人が多いため、祭りの時期になるとそれぞれが自分の地元の祭りに参加しているという。

3. その他の祭り

ここまで上町地区における各地区の神社祭礼を見てきたが、それ以外にも多くの祭りが行われている。この節ではそういった上町地区における神社祭礼以外の祭りの中でも、県内外から多くの観光客が訪れている能登町主催のござれ祭りと、あじさい寺としても知られ、年間を通して多くの行事を積極的に行っている平等寺の祭りについて紹介する。

3.1　ござれ祭り

ござれ祭りは平成 5（1993）年に旧柳田村によって始められた比較的新しい祭りである。会場は広大な敷地を持つ能登町柳田植物公園にて行われる。祭りの内容はキリコ巡行やキリコ太鼓がメインであり、他にも能登町グルメ博、ライブステージ、レーザーファンタジアや花火など様々な催し物が行われる。祭りの中心となるキリコは、旧柳田村各集落の鎮守の夏祭りにおいて用いられるもので、その語源は「切籠」からきているといわれており、神仏に捧げる燈明の意味がある。ござれ祭りでは高さ約 17m もの大きなものが用いられる。能登町グルメ博では能登の食やお酒を味わえるテナントが多数出展している。ライブステージでは歌手によるライブや劇など一

写真 3　ござれ祭り　2016 年 8 月筆者撮影

日を通して様々なパフォーマンスが行われる。レーザーファンタジアはレーザー光と音楽を用いたアートで、ござれ祭りでは平成 25（2013）年頃から行われており、キリコや花火と合わせて光の祭典としても楽しまれている。ござれ祭りには能登町だけでなく、県内からも多くの人々が訪れる（J さん　天坂、女性、67 歳）。

3.2　寺の祭り

地区で行われる祭りには神社だけでなく、寺が主体となって行うものもある。あじさい寺として有名な寺分の平等寺では、多くの人に訪れてもらえるようにと昭和 63（1988）年からあじさいを植えはじめ、現在では北陸を中心に多くの人々が訪れている。

平等寺はもともと菅原神社の宮寺（お宮さんを世話する寺）であり神社との繋がりが強い。また平等寺は真言宗であり、神仏混合の考えから地区の神社祭礼についても協力的である。実際に、寺と神社には関係があり、分けて考えることはない。平等寺の杉の木を切って神輿を作ったこともあるという声も聞かれた（M さん　寺分、男性、76 歳）。

地区の神社祭礼とは別に平等寺が独自に行っている行事も多い。主なものとしては 4 月のさくらまつり、8 月の灯籠まつり、11 月の灯籠まつりがある。

さくらまつりは、あじさいが見ごろを迎える夏だけでなく、春にも人を呼ぼうと平成 3（1991）年ごろに桜を 100 本植えて始めたものである。灯籠まつりは送り盆の際に行われる宗教的なイベントで、先祖供養として行われる。モミジまつりはさくらまつりと同様に、あじさいのシーズンが終わった後に人を呼び込むために、平成 22（2010）年ごろからモミジの木を植えはじめ、いまでは 200 本となっている。平成 27（2015）年からはモミジまつりの際にライトアップも行っている。

M さんによれば、これらの祭りはどれも多くの人に来てもらおうと平等寺が新たに始めたものであるが、新聞、テレビへの働き掛けもあってか、あじさいの見ごろとなる 6 月中旬から 7 月中旬にかけては約 3 千人もの人が訪れているということである。

4. 従来からある祭りと現在の祭り

以上では、旧柳田村における神社祭礼およびそれ以外の祭りについて紹介してきた。以下では、以上で見てきた祭りの概要などを参考にして、神社祭礼やその他の習慣がどのように変化しているのか考察する。

4.1　ヨバレ

ヨバレについては先にも触れたが、これは旧柳田村全域で行われている習慣であり、主に夏祭り初日の宵祭りの夜に開かれる。

ヨバレとは親戚や友人の家を、「ヨバレに来たよ」と言って訪問し、料理をごちそうになるというものであり、親類同士が顔を合わせて近況報告をし、相手の健康を確かめるのにも良い機会となっている。ヨバレを行う家では通常、床の間や座敷のふすまを取

り払って部屋を広げ、御膳を用意して客人をもてなす。御膳の料理はその家の人が手作りで用意することになっているが、現在では仕出しを用いる場合も多い。

また近年では祭りに参加する人の人数自体が減っているほか、親類同士の付き合いも希薄化しており、親しい友人など限られた家の間でしかこの行事は行われていない。

4.2　子どもキリコ

子どもキリコとは、子どもたちが夏休みの工作として作るもので、かつては祭りの際に出されていた。子どもキリコは竹に穴を空けて作られるもので、その制作過程において子どもたちがのこぎりの使い方を学ぶことができるという側面もあった（G さん）。しかし現在では地区から子どもたちが減り、子どもキリコが作られる機会も減ってしまっている。

5. 考察

この節では第 4 節までにみてきた、旧柳田村の祭り全体を通してどのようなことが分かるか考察していく。まず第 2 節でみた柳田村の神社祭礼では各地区において、神輿やキリコの扱いや会食の有無など多少の違いは見られるが、春夏秋と年に 3 回祭りが開かれることや、夏祭りが一年の祭りの中で最も大きく、宵祭りと本祭りの 2 日間にかけて行われるということなどはほぼ共通していた。またヨバレが行われるのは夏の宵祭りの夜であるということも共通している。

神社祭礼が地区内で行われていないのは、わすみ団地のみであったが、わすみ団地地区の人々も祭りの時期になると、自分たちの生まれ育った地区の神社祭礼に参加する人が多いということから、やはり村の人々にとって神社祭礼は欠かせないものであるということができる。

そしてすべての地区で共通して言えることは、祭りの担い手が不足しているということである。その理由としては上町地区における少子高齢化の影響が考えられる。また若者が村の外へ働きに出ていることなどから、祭りの参加者そのものだけでなく神輿やキリコの担ぎ手も不足している。そこで外へ出ている若者にも祭りに参加してもらおうと、祭りの日程を土日にずらすなどの試みもあったがうまくいっていない。

A さんによれば、秋の新嘗祭では、その年に地区の神社で収穫された米を配り、それを皆で食べるというのが一般的であった。しかし現在では代わりに仕出しのお弁当を用意するか、あるいは集まっての食事をしないという地区も多い。

他に旧柳田村の神社祭礼において重要な変化は、神輿やキリコについてのものである。上でも述べたように、少子高齢化により担ぎ手が不足しているため祭りで使う神輿やキリコの数を減らすなどしている地区も多い。また祭りの際にキリコは出すが、担がずに広場に飾っておくだけという地区も見られる。

図 1：上町地区の性別年齢層別人口

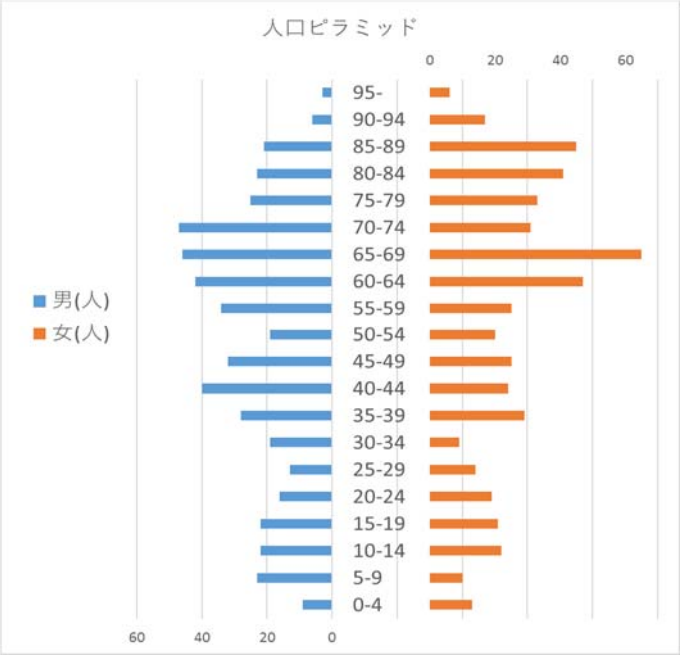

表 4：上町地区の高齢者

	高齢者数	高齢化率
男性	171 人	35%
女性	238 人	46%
計	409 人	41%

（出所：図 1、表 4 ともに 2016 年 3 月 31 日付住民基本台帳から筆者作成）

柳田村の神社祭礼では若者が外に出ていることや、少子高齢化の影響から従来の祭りが変化してきていることが分かる。その結果、祭りで用いられる神輿やキリコは減っている。第 2 節でみた寺分・五郎左エ門分の夏祭りが合同で行われていることなどは、そういった状況に対応するためであるとも考えられる。

また秋の祭りが新嘗祭として行われていることも共通していたが、参加人数の減少のためか、以前のように料理を持ち寄って食事するということが少なくなってきているということであった。しかし仕出しのお弁当を用意するなどして、地区の人々が祭りの際に集まって食事をする習慣が続いている地区も見られた。

このように神社祭礼はその担い手や参加者が減っているという問題があるが、各地区でそれに対応しており、祭りの運営に関して特別な支障はないように考えられるし、現在でも村の人々にとって神社祭礼が生活の重要な一部であると言える。

第 3 節で述べたような新しい祭りは、その内容や目的など従来からある神社祭礼とは大きく異なっている。神社祭礼を行うもともとの目的には豊作祈願、豊作に対する感謝を示すということなどが考えられるが、新しい祭りではそういった目的よりも、より多くの集客をするための工夫がみられる。

上で見たように、平等寺では桜やモミジを植えて祭りを行い、新聞やテレビを使ってそれを宣伝するなどの工夫を行っている。またござれ祭りでも平等寺と同様に祭りの宣伝を行っているほか、内容に関しても集客をするための工夫がみられる。一つには多くのテナントを出店しているということもあるが、知名度のある歌手を招いてのライブス

テージや、レーザー光線を用いたアートなどもその工夫の一つと言える。とくにレーザー光線を用いたアートは祭りのメインとなるキリコや花火とともに、光の祭典というテーマに合わせて行われており、能登の伝統的なキリコとレーザーファンタジアという新しい催しを融合させる工夫がみられる。

やはりこの 2 つの祭りのように多くの集客ができているのは、内容もさることながら地道な宣伝の効果なのではないだろうか。

とくにござれ祭りでの催し物では、ライブステージやレーザー光線を用いたアートなど新しいことにも挑戦しているが、それだけではなくメインとなるキリコと合わせて光の祭典としており、伝統的なものも尊重しつつ新しさも出していこうという工夫ではないかと感じた。

6. おわりに

今回の調査で僕は祭りを担当することになったが、残念ながら調査の中で祭りに参加できたのはござれ祭りのみで、うまく調査ができるのか不安だったが、上町の方々のご協力のおかげで、参加していない祭り等についても聞き取りを行うことができた。

この調査の中で村の人々の生活と祭りがどのように結びついているのか、またその祭りがどのように変化しているのかを知ることができた。そして様々な問題の中でも伝統的な行事を継承していくことの重要性について実感することができた。

最後に、本調査に協力していただいた方々に感謝を申し上げます。ありがとうございました。